

泰時明斷錄
五

~ 13
3367
5 1/2



18
3867
5

北條泰時明断録第一輯卷之五

東都

松亭金水編次

第九回 舍弟の義心

再説十三屋九四郎の音喜未渡と説伏せを多くみ兼引せしむるの
彼処へゆくと真情と尽さんと心裡深く歡びその日の暮ると候むと
頓て火點を頃ふまき急ぎ河原ふまき例も往る変湯の茶店ふ
腰うち掛けては候侍みお此鈍吉が飯を食まきて例の如く立出り
見るふ九四郎なる先達て彼処に居るといふ急ぎその傍りふ
近づく音喜が便宜と圓なるふ今日箇様とて異儀あり渠と説つけ
たり然らば彼処へ往ての後何事も譚んと頓て茶店と立出り密に

大正十年八月廿九日
本大學出版部贈

月新録第一輯卷之五

如く九四郎と戯ふまゝ了得音喜がめりて心も愧て日毎に往び或の
 三日五七日程で経て彼処へ到り。歡樂と極めけるが日月の過安まらん。
 奔箭下流の水も等一夏もや凜々秋もな紅葉と愛るる長月の頃と
 るまに今の河原の納涼もあつて障子の破目眼だらる松の梢と吹風も
 身も染つて心地して福とさせて入虫の啼く野邊の草木もあつるめりて
 此の何と仮託と立止まらぬもあつて程絶く九四郎も逢ふこのあつた
 密に胸と痛める。兎や斯とその計策と肚裡も廻らせどもあつてふよた
 智恵も出でる色欲も限らぬ萬のこと人も隠して做し業もその始め
 こそ密やうも忍ぶごころも回重あり。竟も馴て右々の人のつるも憚ら
 りて破れ生ずるとまらう。況て色欲のその根も思ひ込てこの切る

且び今の悪きこと知りあつて誠むらと甚く難し。然るに此のいふ堪難
 鈍吉の商ひは朝頓と暮飯の畢竟其処此処と他の家と恃まん
 ともいふこと便悪きこともあつて鈍吉が留守のやどふ吾家へ吹か如とほ
 と或は九四郎も相譚に同し忍び九四郎も逢ぬつゝ須臾折るる
 夫徳伴と鈍吉がわらひ候てさふ未だ名も取らんとあつて頃も別は派
 告てとも飯ると。屢らまは四隣合壁の頃竟もいふまじさる。雄子の屢
 入とてめる空めて善き事ゆあつてと低語りもあつてと。この大事の
 正るまは誰のいふ鈍吉も斯と告る人もあつて夢もあつて薄暮
 時も飯る日母も此のいふ酔て在り。血鉢もど取散らる。このあつたも
 常らう。渠が酒好いあつてのう。是さすいふ心も記はる。於て九四郎

於此あつちのまままくく縦たりく后のちのいその外見がまもた悼なむらび然らまぶその評ひき自らり世
 間けんへ高たかくまつまむまどまどま知しるまのま亭主ていしゆ計けいりのま奥おくのま小こ毛け郎らうのま先まづま項けい嫂せうのま諛うそ
 言ことをま兄あにのま不ふ貞ぢやうとま受うけますま。竟つひもま一いっ回まいもま訊き未ま移いだま兄あにはま極ごくめまてま愚おろかまふま嫂せうへ
 婦めづらま。且かつ怜あはれましまくまとま妻つま辨わるままま未まのま心こころとま竟つひ東あづまま兄あにのま面おもてへま泣なきま塗ぬ
 このまま一いっとまのま心こころとま思おもひまのま心こころとま寄よるま。その風かぜ因よてま探たづねまるま。蔭かげ多おほしまらま。
 兄あにはま補おぎ佐さふまるま。まま居いるま所ところのま程ほど十じゆ三さん屋や九く四し郎らうとま婦めづ奔ほんのま噂うわ隠かくれ
 るま。皆みなをま心こころとま思おもひま。尚なほ委あやしまくま動うご静しやうとま因よてま心こころとま疑うたひまあままま一いっ日にち
 往むか來きのま辻つじのま心こころとま兄あにがま來きるまをま俟まちたま。鈍どん吉きちのま何なに気きもま例れいのままま笛ふえふまたま
 飴あめとま擔かぎまてま來きりま。美み次じ郎らう其その處ところにままま兄あにとま久ひさしまくま對たい面めんせまるま。換か
 らませまふまとまあまるま。歡よろこびまとま倍たはましま。先ま頃ま此こゝのま間ま違ちがひま。いまとま腹はらをま

のま入いりま。夫おとこ等らのまこの善よ悪あのま明あらま欲ほしまとまいまるま。固かまま同どう胞ほうもま
 のま彼かれはま常じやう言ごんのま血ちをま洗あらふま類たがひもま更さらふま益えきとますま。処ところもま
 今いまもまあまとま月つき日ひのままま和わ殿でんのま腹はらもま自ま然ぜんにま解とけま。嘘うそもま分ぶん解かい
 へまとま思おもひまのま心こころとま後ごのま訪まねま。然しかしまあまれまもま兩りやう親しんのま在ありま。後ごのま身みもま
 このまま大おほ切きのま兄あにがま安あ否いなのま平へい生せいのま餘あまりま。訪まねまのま美みもま恃たりまとま
 近ちかにま傍わらへま往むかふま。他たのま和わ殿でんがま静しやう動どうとま因よてま心こころとま事ことのま心こころとま樂らくま。月つき日ひ
 送おくるま。此こゝをま善よらまぬま評ひきとま。いまとま心こころとま掛かるま。夫おとことまあまとま和わ殿でんがま
 家いへのま動うご静しやうとま因よてま幾いくもま。いまとま因よてまめまのま心こころとま今いま日ひ此こゝにま往むかふま
 ままとま鈍どん吉きちもま美み次じ郎らうのま志こころのま心こころとま感かん下げ。先ま頃ま渾ま家かにま罵ののちまられま愚おろ
 るま胸むねにま居いるま。一いっ圖ともま実まこと言こととま心こころとま淨きよてま往むかふま。いまとま生ま憎にくみま。朝あさ飯いひりま

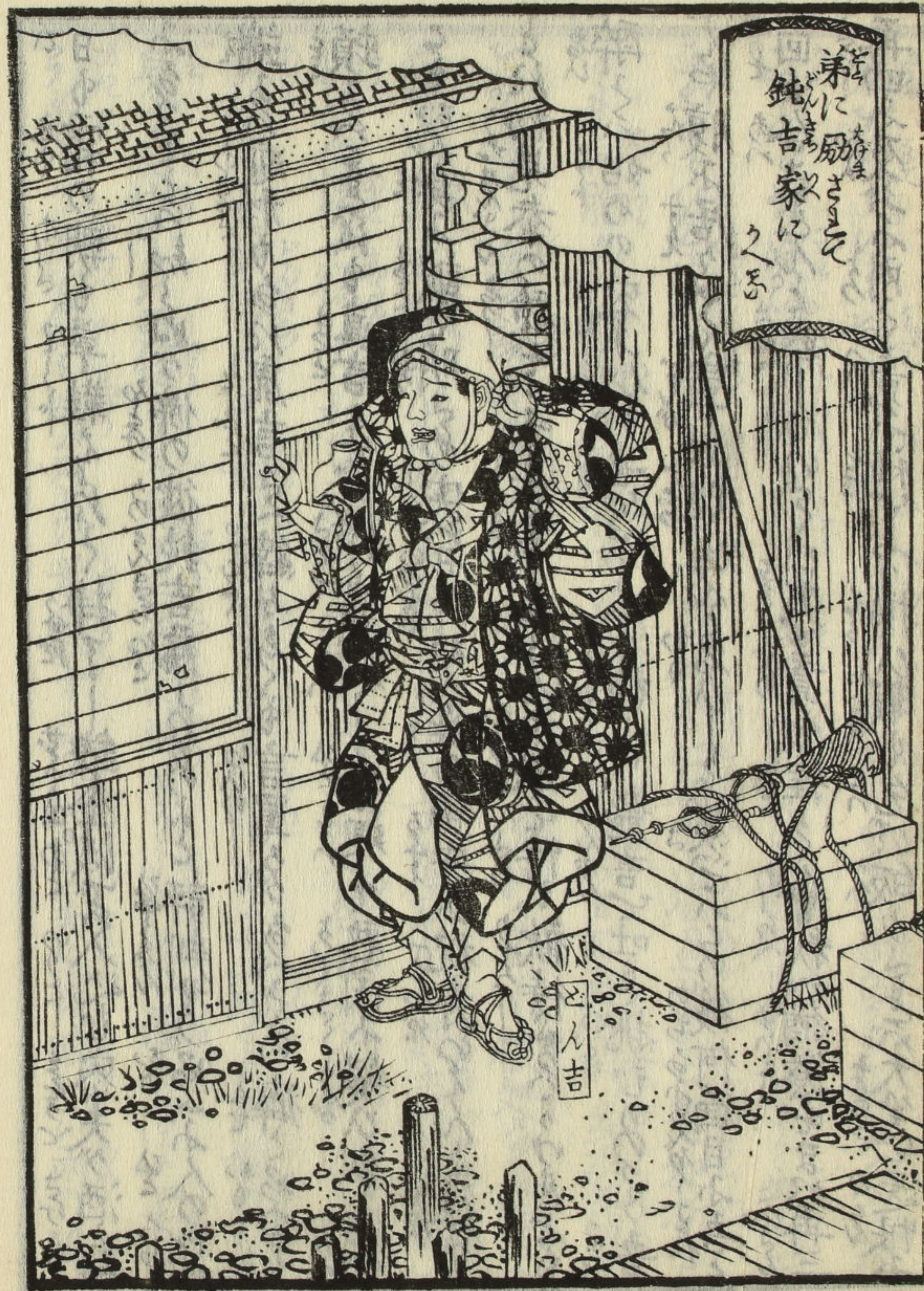
容と見て。ゆづ姫の奉動と心と決して罵りし。吾もさう鈍うなと云ひ返して。うち笑ひ美次郎よ腹をさそ。先頃のひい合已ま心うらやまし。あつて全くお此が入智恵も然心得と堪忍せよ。と忽地折るも同胞のいふ言は骨内の誠とこそお知れ。干時美次郎四辺と云ふ。愛の餘りお端近を物譚りお便利し。彼知るる酒店へゆづく。委しく言さんおさ末あ。先まき往や。お鈍吉の荷を擔げ。後お後ひにかの酒店の奥まうら。方へうて美次郎の酒と散れ。詠へら。お鈍吉おうち對ひおん身も少し推し。あや此項まけお嫂のおん身が苗守ま四條まうら。十三屋九四郎ま。小間物の商人まは。夫と引籠。酒と飲。嬉まら。お奉動まうら。鈍吉。夫等。曉ら。雨の降

い。霜の朝も。草鞋をぬぐ。拵。一。錢金。凌で入込む。密夫が酒と散。おあるぞと。お知ぬが。佛の彼鈍吉。慈のためよと。評判せう。おお人の。の。端。あ。の。迹。形。も。ある。虚。言。ま。又。緯。々。ま。も。言。罵。ら。ま。お。の。癖。と。お。う。ら。頓。ま。の。お。言。は。も。真。言。ま。お。言。は。情。ま。お。言。は。廻。し。人。と。廻。し。お。熟。因。お。疑。ひ。な。し。今。こそ。おん。身。お。誠。と。明。さ。め。実。は。日。外。おん。身。の。苗。守。お。祝。寿。の。おん。と。伴。ら。と。れ。初。見。泰。の。驗。ぞ。と。お。喜。喜。と。お。ん。老。婆。と。恃。り。歡。待。ら。ら。の。お。い。ど。も。醉。ら。お。始。め。の。容。お。似。び。吾。と。と。く。種。の。艶。言。と。吐。き。挑。む。の。う。ら。吾。と。お。腹。お。居。る。と。言。下。に。愧。し。おん。と。お。ひ。ら。と。然。ぞ。い。ら。の。後。何。面。目。お。吾。と。面。と。合。さ。ま。おん。と。察。し。て。い。ら。の。お。言。は。責。を。程。う。會。釈。お。猶。懲。お。ま。お。再。三。再。四。お。及。ぶ。お。因。り。竟。お。袖。と。う。拂。ひ。暇。も。乞。び。飯。く。と。お。夫。等。と。連。恨。お



奸夫淫婦
情小迫つて悪巧
なす

九四郎



弟に
鈍吉家
に
久

鈍吉

種ことおん身お誤言せしものあらんと當下お推しつゝよくあつておえ
 めりしおん身と吾との同胞ありとよく知りあつて吾と挑むたゞ酒狂
 の戯とありとの道お背きし娼婦ありや。然る他人の何ぞ忌まは
 何ぞ憚らん世間の風評偽ありと。諸をわん身お告るなれおん身まづ
 試ふ何より早く飯りて裡の容とあるべし。當下怪しとあつて速お
 離別して後の患へ預穰ひあ言とて是の事と密に語るべ鈍吉の園と等一
 吐息吻き常言の他人の喰寄り親の泣寄りとのつゝ此処お先頃思ふ
 心よりおん身といふ恥められた。了得骨肉の因とて夫等改更お悔しとせ
 陰あり陽ありの吾為とて心と辱るなまを嬉しさと。漫お涙とるべ
 て。鼻汁啜りあげて儲りあやう。吾の日毎朝とくわく。薄暮ありて家お飯

らば。然れどその苗守のやど。如何なる奉動とあるやらん。つゝ因する人も
 ろの且お神ありぬ身の知るべし。日毎飯りて酒お酔て居
 るとたもわ。或は髪をどうち乱て。寐惚と顔お在と。今思ふ回数
 ありしが。夫等お心就き吾の日来より。這奴酒は嗜む。けいもま
 飲る。斯やわんと仮初おひひとて居るの。諸の且お密夫と家お引
 入とて楽し。思ふ憎き娼婦多。渠日来より吾の。あつて父の母の
 多。同胞とあるは身と。廣き世界お便とす人との。野中の孤松
 不測の縁でたお帰き。おん身と契りと結ひて生涯便とす。他は更お
 るたの。斯不束ある女子ありとも不便とて。つゝ言も便
 る。三東と駈歩行。暑と寒との厭ひ。梅つゆも畢竟誰かぞ。

夫婦の口と快くはさんとおふりあるふ。さ心根のわろぞと今も知る
 き好くおん身が詞のぞ。か抜て家お飯り。その容子と見留んと或は歎
 或は怒り。然するこの屢ある。美次郎の尚論とのやう。かん身律儀る心
 う。斯の如きのて我園を二園お腹もまきまき。餘りふいふく腹まき
 緯と仕損ずるのま。然まきまきその容と見て。ゆ怪しとてわろまき
 音喜お譚りの音喜の萬お馴らる老婆悪の計らひは。夢れ其
 計らひおんが心お應せぬとのわるふ。頼お在下お初し。ゆその折
 めの吾まてゆなく。計らふ條もゆま。努めゆ腹まき。漫と流るゆひと
 愚直の性とゆま。ゆと細おふの論。おて酒店とゆおの西と東へ別
 ち。鈍吉の尚身が影とえ送るて吐息の雲時わろ。か日お流るて今日

えや未刻お近。今も直おま飯ら。這奴おが不美とえおま。ゆるく
 と點頭て頼て頭とゆ廻。急ぎて家路へ飯り。ゆお於此の今日もま。
 九四郎とゆ招き。朝より二人酒酌交して。や樂み流まけ。九四郎お抱
 要のわろとてその日お限り。未の半刻とゆま。帯まき流ま直。翌こて
 来めと別ま流生て密お其処とま。折る鈍吉の喘。飯り来り九
 四郎が吾家とま。後影とゆるとゆその間。十反をりも隔お。
 面容とま認めが。九四郎へ門とゆら。豆と名お傍る。横町へ入
 り。嗟悔。今雲時早。か彼等流並お。捉へんの流念あま。と
 鈍吉の心裡悔。ゆま。今東詮る。やゆ内へ入る。お火桶の切お喰ひ
 散せ。枕血る。片とま。か此が躰のま。枕る。お在が儲こそと

了得の鈍吉。怒り心頭小影とあがり。宣うる証状もあれど。彼是のやま
 渠が罵り狂人と且怖と敢て一言とも発せば。當下此の時あつて。良人の飯
 来る。来る。来る。足の喻へるまの胸裏さうかが居て。人へまご如何おして
 何時よりも帰りの早さ。とぞ斯の怠りあるを善ぬとよと口裡小喧まじ
 まく。椀無で厨のくす持ち。鈍吉の草鞋の紐と解んとせうか。あひうへく。その
 ま音喜の方へ。この頃筒様の風因り。因て今日その実否と云角ん
 為小刻限と外を飯と。如此とるまご。一旦遅くと。奸夫と。自捕へ獲
 ね。証状とす。見た者も。かく言への鳥許ありと。呵りあう。おね。既ふその
 動静奸夫を。派し入るる。疑ひ。始り。おん身が媒を。迎へ。うみ。か。此。る。お
 頓小告。参ら。は。あり。と。因り。音喜。始り。て。因る。面持。の。す。ま。れ。ぬ。縁。て。心得

らる。と。る。ま。ご。心。裡。ま。ご。溺。惑。と。て。頓。面。答。の。詞。由。出。ね。と。忽。地。小。胸。と。鎮。め
 そ。何。者。が。か。う。と。派。お。ん。身。小。言。う。知。ね。ど。も。誠。の。あ。ら。う。と。日。来
 よう。と。お。ん。身。が。優。く。の。め。入。歡。が。さ。よ。た。処。へ。嫁。入。と。僥。倖。あり。と。歡。び
 居。ろ。我。何。と。不。足。小。媼。奔。と。お。ん。身。小。耻。と。共。さ。然。い。わ。ね。と。老。婆。も。斯
 隔。ち。居。る。ま。ご。日。毎。の。動。静。へ。知。り。あ。ら。う。人。の。口。の。鎖。あ。ら。う。昔。より
 世。話。も。の。へ。実。る。と。派。置。く。の。世。上。の。人。の。癖。あ。ら。う。何。事。の。老。婆。小
 住。と。お。ん。身。今。より。往。く。か。此。ぬ。が。胸。も。さ。い。う。然。る。と。あ。ら。う。び。と。い。や。お。ん。身。が
 胸。も。暗。る。や。う。小。計。ら。ひ。て。ん。と。い。ひ。ま。ご。帶。ひ。ぬ。あ。て。鈍。吉。ぬ。よ。吾。侪。一。ま。り
 往。て。来。る。と。お。ん。身。暫。く。ら。居。て。苗。守。と。い。ふ。う。案。の。あ。ら。う。日。来。より
 親。し。お。ん。身。が。う。と。い。ひ。娘。分。と。も。あ。ら。う。か。此。う。う。の。と。ま。ね。お。ん。身。の。斗。り

とら飯と夫とつろよりか此のち出音喜ぬとの物語り思ひの外長く
もて任しわ在りけん其処に温湯も沸くも腹もさ空あんと湯豆腐
はみそ在り。飯も出来てあつたね。頓と夕餉と給べぬ。常の姿も此が
なまら怪しと心着せぬ。豫て深きも愛ぬ。か此が斯優に扱ひは
心も歡ひ何事も。つらと成はものいひ其夜の既も想もり

第十回 明断邪正と分つ

七人の兎の生はとも女ふ心と弛するも古へもの常言あり。況て此の残毒先
頼の狡者あり。鈍吉がその色も愛香と慕ひ。泰然と起用と俱
あまを將ふこと。蜂と懐ふ措も尚危う事あるべし。斯て此の音喜
より。鈍吉既も是と関わり。免や斯のや。成関く。西個密に譚らひ甘く

鈍吉と詐変て。お其座と済すもの。鈍吉もま欺く自ら。更も異なる
躰を見へね。この後のと油断るじ。然と九四郎も逢ひて。樂しむと。
容易く出来がごと。夫小就此ふ就か此の人知は胸を痛む種と工
夫へるせ。元と非美の條る。更もよた沉吟も如び。九四郎も
其の頃頓よ告て足と駐り。四五日の慎しめども。廻る因果の車井戸深き思
ひも堪る。一日九四郎に鈍吉が留守と窺ひ密未り。月も叢雲花
風と萬事妨のあつた。世間の慣ひる。お況と吾もこの戀路へまあるの
偷むるね。今もあつた。坂の関の鎖も固く。糸路の橋も絶んと。人の
生涯幾干あるぬ。思入人も遭ひて。心の痛め音も泣て。可惜月日と
さんへ互も鈍き業も。なま野の末山の奥鯨よる。濱虎伏を野辺も。

厭ふふらうねとるまは。諸俱小走らん。思ふも九四郎の教代
 ちふせの塵もあつ。東ふ他郷へ走らん。心苦く如何せん。額と合せ
 種々と密めた語りて互ふ点頭莞尔笑と。是ぞこそ孔明再び世ふ。ちの
 ん身が智あ及ぶた。九四郎。あは。称賛す。此の九四郎が負ち成り
 既ふ。ん身が情ふ。まは。寐ても起ても。いふ絶び。借を。か。の大膽。る。斗
 らひ。做する。ま。ん。身。の。後。是。と。忘。と。よ。る。水。性。と。あ。あ。飽。て。捐。ん
 と。の。あ。る。命。の。け。も。恨。む。事。の。豫。下。も。對。該。做。して。あ。れ。ぬ。ぞ。
 のふ九四郎。岡も敢び。如何ふ女子の愚痴あり。とも。その。念。の。入。過。ら。
 然る心の一点。わ。あ。斯の。どの。苦。勞。の。せ。夫。等。の。あ。安。心。と。今。の。一
 儀と計りあ。と。互ふ。示。合。の。人。の。あ。間。ふ。九四郎。の。枯。魚。と。取。り。な。斯

か此のその夕。良人。飯。後。う。け。今日。の。殊。さ。う。霰。交。り。の。小。雨。の
 折。と。降。さ。ふ。ま。ま。裡。ふ。居。る。も。堪。が。た。外。面。然。る。寒。う。け。何。と
 か。の。思。ふ。も。雷。守。居。も。使。の。者。の。あ。け。れ。買。物。の。心。に。任。せ。け。温。湯
 林。火。の。あ。つ。そ。と。冷。と。今。日。の。寒。さ。凌。ぎ。の。を。信。ぢ。折。敷。小。載。ま。さ
 枕。血。の。翠。の。眞。土。の。枕。膳。著。と。左。入。措。る。も。心。雨。の。間。違。ひ。ま。ね。と。思。ふ
 前。象。の。あ。る。心。も。着。で。鈍。吉。の。その。優。さ。小。歡。ぶ。と。大。方。あ。る。高。胡。坐。し
 て。頓。く。飯。と。喰。み。む。味。さ。目。の。味。噌。汁。と。三。三。挽。食。ひ。寒。さ。の。大。く
 忘。ま。さ。う。奇。妙。く。と。古。う。ち。鳴。と。頓。て。飯。と。喰。ひ。終。り。火。桶。小。う。添。ひ。く
 在。ら。う。半。响。を。う。ら。な。る。や。と。果。心。神。悩。乱。と。七。七。敷。り。血。と。吐。出。し。
 唯。る。る。ぐ。ら。ち。弱。り。の。嗟。苦。と。叫。び。の。果。は。竟。ふ。黄。泉。の。客。と。あ。る。

嗚呼との鈍吉の愚直あり。非義非道と做らるる。日毎活業後
 勵と人と持めば更小悪報と被る。所謂たの身の女婦の為小毒害
 らしむ世と没ふ是を前生の宿業を彼も死す。此の死を因果に罹
 る所多る。在斯ふれを最前より裏表の戸を固く鎖し向の隅紙など
 悉く建切らば外面へ遠く況や近所合壁の如く人更なるは此一人
 占頭でもぐツツツ着替の衣と祇小包と家内の銭金集め腰の傍
 纏ひつる夜更後候らちふ。亥刻も過子刻の鐘の音幽小音に
 なる。時分なりと豫て一の準備する。板椽と揚ね下小鉋屑或は
 手鉋の屑を積る中へ火と狭元のごく小板椽の蓋と做り窺
 へ折し風の吹来りて火の忽地燃つる。煙をのこると斯ていふと

裏の戸を閉け。雲時窺ふ。火の忽小障子と傳ひ天井より屋根
 へ火の煙の八方散乱。當下近所の甲乙等。是と云つて失火あり。
 その防げへと寐惚らる男女と呼起。帯もあ敢びて。ま出たきで
 その間ぬる鈍吉が住居する屋棟一圓猛火とある。冬焰とことち昇り
 撲消はくもわらざる。周章と資財雜具と持出。或は走てひた推し
 負ひ我さらゆと逃呻吟。斯て美次郎は四條涉り。失火ありと聞りも
 兄が家居の心許る。速く準備と逸足出。駈付る。名火の四方へ
 廣がる。多く小寄もつ。且に傍る人ののあまひ。火元鈍吉飽ありと
 聞て更胸もち居。近所の人ののあまひ。大方の差ふは。ま如何は
 て火と出せ。いと苦く。ま更とせ。速莫兄鈍吉。何方へ往らん。覺東を。

其處を此処を馳廻り。これを見れば、兄の思ひく心も、既に家
 より火と出。言解み。と馳出て堀川まで入りや。け。然るも二人は
 此処を居ぬとあり。猶遠近と尋ね、折柄火のやうく四五軒に
 て。頓に鎮り。少く安堵の思ひ、做せども、兄の面と見え、心中
 さうみ落着び、猶隈々として尋ね巡る。此の往逢ひ。美次郎急ぎ
 馳りて、まづ其恙を祝。諸兄も一同火を避り、あり。何方か
 在はと問ひ、此の面々の風情。その火元が家のより、床入る
 時、たゞ更ふ前後に辨へ、吾眼の覚て起ると、兄の思ひ、
 周章と頻り揺起。早く外方へ出ると、声くうらも、厨の坐敷の一面の
 煙とる。障子隔紙の燃る。その怖も、喻へる。逃出れを散々

此互に往方と知り、先その嚙や。案として尋ね、人々も
 ろの傍で行め。幾十面も存亡生死と信。中ふいひ、美
 次郎も、少く憂ひ、惑ひ、箇むろの火で、場所も狭う。然るに、先刻より
 おん身も、尋ね、吾も、まづ屢探せ。曾て、知れ、不措る。まづ他、箇て、其
 焼跡を、んと、鈍吉が家の跡へ、あて、る。火も、大く、消ぬ。鉄板
 掲げて、焼灰に、掻起し、入りて、元坐敷と、覚。所、果して、人の死
 骸あり。燈火、近く、ついで、と、總身、焼、薫りて、誰、も、も、見え、
 び。然るも、鈍吉が、坐敷の、跡、相違る。餘所、より、来り、を、燔、死、
 きや。兄、疑ひ、あ、不、覚、涙、さ、を、悲、歎、
 此の、迹、より、来り、吾、遠く、揺、起、せ、も、寐、惚、て、猶、豫、
 人、間、の、煙、小

喫てその所へ倒さぬひーのゆあもえん鈍吉ぬー小相違さうといひ焦る
 死骸の傍へ蹲まよとほてま。美次郎ハ今さうふ無念の涙遣方あり
 て返らぬことあるまじく如何めく火に中か假令伏くかびとも見
 八固より下戸るれ。酔や前後と知らぬあは煙の下に潜りて命の佐
 うめつたに。かる最期ハ前生の因果あるのいざ知らぬ餘り鈍吉と
 るるまら。同ト家にて同ト所へ卧さるち一人の燔死一人の夜の一ツツも
 纏ひく耻出ぬ人幸と不幸のあはら。馬不猜きてよまんと言せ
 も敢て眼を睜り。か此の声を高くして。かん身がごとくいつ時ハ何やら底小一
 物あて。吾所為を疑ふめ。吾侪悪人多うこの人も。現在良人と火ふ
 投て燔死するこのるる。たやま鈍吉も此方の隨意とよと束ね燔

死ねま。嗟心得ぬ口説る。勿論兩個の家内ふ。さう身のそま佐うし
 早く目の覚る故ゆ。別小仔細あはぬの涙と敦圍てのいれど。美次
 郎もまゝ声と張あび。たえ兄が熟睡して火の燃る所知らびとも。かん身
 既小揺起。猶夫もくも正氣着びる足と楸令と曳出ても。外面へ出
 容易かるべ。然りまて論せん人の思はん知由替把ま。此方へ
 来りね。とお此が左りのゆ。成曳ま。音喜が方へあり。如此この下成
 告。斬目か此とん身小預ける。心得ねといひ捨て走りか。六波羅る。
 北條春時ぬ。が同注所へあり。云云のより。成訴あ。嫂お此が。緯の顛末免
 角不猜くいゆ。召呼れ。実情と吐せぬ。有難く存ト。まると言。い
 則そのより。春時主へ演説。い。が。関あひて。美次郎と。やんが。言す。如ま。



通りその理あね。嫂の身も女の方あり。周章て良人と顧る暇もて駈けや
 何とせもわれ鈍吉が死骸と点檢しその上を。お此も糺す。とて美次郎に
 案内させ。則四條小往の鈍吉が死骸と改め。且合壁ある人と集會す。失
 火の次第と聞かひ。六波羅へ歸館あり。夜もあつと明らふ因て。則美次郎
 お此と始め。音喜とも召寄らさ。まづ一通り尋ねらう。お此は始め美次郎の
 言たつごとく。言して。音喜の失火と聞かひ。老年とのひ女の方。其
 場所へ往由合さば。故小顛末のあつと。泰時扇を拘ふ。美
 次郎とえ返りあひ。美次郎兼。你兄が不慮の最期。小顛倒は
 てあつと。後。訴へか。と覺えら。今此の如く。死事實殊小分明。渠
 女の身も。ひか。とま。め。と。曳。か。ま。ね。と。お。此。の。も。最。り。然。と。お。汝。が。疑

がひ。理。似。て。理。あ。つ。と。且。證。扱。と。す。た。ら。ま。の。其。の。訴。へ。取。扱。が。し。速。く。ま。り
 でお。後。日。定。り。あ。つ。と。證。扱。と。索。め。ば。ま。も。訴。へ。か。し。と。命。め。れ。と。美。次。郎。は
 いと本意あつと思ひて。お此の了得。肚裡小覺えある身のこと。大膽あ
 るもの。く。底。氣。味。悪。く。あ。ひ。し。始。め。安。堵。の。思。ひ。成。做。し。衝。と。ま。せ。お。ん
 とする時。美次郎お此が裾と撤へま。嫂もあ。此。處。を。一。言。ま。う。ま。と。お。
 先小吾母お仕。然ら。焼。跡。に。あ。つ。と。如。く。と。鉄。と。擔。び。て。入。り。と。た。ん。身
 じ。後。邊。に。居。り。坐。敷。と。覺。え。た。所。へ。お。目。が。真。黒。く。焦。ら。る。人。の。死。骸。這。り
 見。あ。て。の。あ。つ。と。松。明。さ。し。と。ま。と。り。と。身。體。更。小。焼。爛。と。男
 女の差別も。知。れ。た。然。ら。お。ん。身。の。其。處。小。跪。と。鈍。吉。小。疑。か。ひ。は。と。と。
 声。と。放。い。と。塵。ほ。と。抑。そ。の。死。骸。と。鈍。吉。あ。つ。と。何。の。見。究。む。と。ら。ら

あり。急まはせらる。其分解らる。言入と詰り問はる。頼やうら。御前
 あり。美次郎よ。横車へ推のめらる。吾家の焼跡は死人のあら尋ね
 由。知。良人ぞ。言。わ。い。一。と。ま。ま。然。其。頃。悲。し。の。胸。堪。か。孫
 声。と。揚。て。泣。か。河。と。を。あ。る。鳥。游。る。て。我。の。入。の。る。と。白。眼。つ。ま。北。條。春
 時。美次郎の。く。詰。り。う。吾。の。て。問。ま。く。せ。る。思。の。仔。細。あ。れ。是。と。回。を
 如何。此。汝。煙。と。を。逃。出。る。時。常。の。如。く。小。帯。と。あ。且。着。替。の。衣。二。枚。袂。も。包
 と。持。く。中。の。一。包。も。包。も。あ。ら。る。當。下。包。も。元。と。問。れ。て。此。の。物。と。せ
 固。う。大。胆。多。の。の。世。の。恐。ま。の。仰。着。て。夜。半。の。失。火。の。争。う。宵。う。衣。と
 包。も。あ。ら。煙。の。駭。き。駈。出。る。元。も。在。る。着。替。の。衣。の。ま。纏。て。持。出。し
 外。の。帯。も。締。め。着。替。も。袂。も。包。も。と。答。う。と。問。く。春。時。ぬ。一。借。の。汝。の。萬

小。就。く。抜。目。あ。ら。女。子。ま。の。悪。ま。張。せ。び。と。言。う。美次郎。疑。ひ。と。更
 小。死。理。と。ま。う。の。汝。等。俱。も。争。へ。ど。証。と。す。ら。如。く。世。の。水。懸。論。あ。る。の
 あり。二。匹。の。術。計。と。以。て。真。偽。の。程。と。正。さん。誰。う。あ。る。の。狗。と。牽。け。と
 わ。り。ま。は。應。と。面。答。を。雜。式。が。二。匹。の。狗。と。牽。出。し。春。時。と。見。返。え。返。う。の。ひ。て
 美次郎。鈍。吉。と。殺。し。て。後。小。焼。と。疑。ふ。此。の。寐。惚。と。燔。死。と。う。と。ま。ま。こ
 生。ま。う。燔。死。と。既。小。死。と。と。焼。と。の。見。究。む。所。あ。り。然。れ。二。匹。の
 狗。と。の。不。便。あ。ら。証。扱。と。ま。ま。二。匹。と。打。殺。せ。下。知。隨。い。雜。人。等。豫。て
 期。ら。棒。と。う。伸。べ。眉。間。と。礮。矢。と。打。針。の。一。声。叫。び。と。驚。ま。う。と。生
 くと。死。と。う。と。二。匹。廣。庭。に。並。べ。柴。薪。と。覆。ひ。く。頻。て。火。と。狭。む。わ。ど。よ
 又。分。間。は。火。と。燃。揚。り。時。の。間。は。二。匹。の。狗。黒。焦。む。ぞ。あ。り。あ。る。春。時。二。匹

知ろねど。理非との判らば吾のこ。縛しめあふ心持をよみ美次郎後片
 負いで吾と寛ふ墮さんとするわん計ひの恨めや。と眼血まると然るれ。
 光貞と見見えんと。鈍吉死骸え終りの頼みか此れ縛りて引と
 来よとの上意ある。言をどわふ彼処へおな。腹ふ在るひ言まへ。見
 負のぬり負負ぬぬ吾の直等の上我知むびといひ。組子に下知張
 傳え矢度よ引まき六波羅ある向注所へおつ。そのは。泰時主言
 及れを則ち前へ召居ら。如何ふか此鈍吉と汝がまふ懸殺せしる
 べ。この期ふ及びて陳ずるも。遁れ果へたさる。速よ首状せよ。
 と宣へ六頭と擡げ固来覚えのゆらぬ。いふ責問め入とも。そま怖
 さふ覚えたる罪と在るやま。うさ。察しめといふ顔。泰時熱眺望のひ。

外面如菩薩内心如夜叉と佛の説れめ入る。さうのふ似ぬ大胆不敵
 そと誰う在る九四郎とへ引けとの詞と聞か。此の忽地胸うち裏さ。頭
 と垂とく居らる。時よ組子の九四郎へ縛らる。ひと。お此と
 兩個ありあふ。泰時や。膝張進め。風聞張のそ九四郎と捕り。
 先ふ詰問する処渠一々首伏して。その大罪の発覚する。汝のま。知らば
 と陳ぞ。猶とよめても。知らる。わと。責問のふ當下ふ。か此の顔色青紫あ
 如く。九四郎を恨め。一気よ打視るの。物も言ひ。泰時再び声と揚て
 如何あ。と問め。今い通る所も。一什と詳ふ首伏る。さ。音喜
 の傍ふ居りて。と見聞ら。み此の。吾身の上と。さ。更ふ生る
 心地も。顔色土の如く。みあ。て。控へ居ける。泰時。初来實に大

度ふして人と憐れむをいふ。我児の如くふ做しあふ。名罪人の九四郎と。お
 此の兩個めて俸且りぬと音喜喜有之の糺ふ及びぞ。わら娼婦と媒しと。
 無超騷動ふ及むしと死罪とありと京洛中と追拂ふを究まりなれ。
 音喜喜の案よ相違しと上の仁徳依仰せける。斯て九四郎と此の兩個法の
 極刑よ處せしと美次郎の死骸と厚く葬りて追善佛更いと町
 噂ふ吊ひける。後ふ木綿屋の主人先約の如く。美次郎ふ鷹とむを見
 繁昌るけりともん。

北條泰時明新録第一輯卷之五終

小説繪本目錄	繪本新説二熊傳	北條泰時明新録	全七冊
唐太宗軍談	二編	繪本顯勇録	全六冊
宋史軍談	三編	同田村物語	全十冊
前太平記	四篇近刻	同報仇雨夜傘	全六冊
同 圖繪	全六冊	同 龜山話	全十冊
前々太平記	二篇	同 合邦過	全十冊
繪本扶桑皇統記	三篇	同 孝感傳	全十冊
同 後篇	四篇	同 鎌倉年代圖繪	全十冊
吳越軍談	同 緇妻表紙	同 金刀比羅神靈記	全十冊
繪本吳越軍談	同 二編	同 彦山權現靈驗記	全十冊
同 貳篇	同 浪花俠夫傳	同 伊賀越孝勇傳	全十冊
同 三篇	同 報仇安達原	同 忠孝美善録	全十冊
同 四季物語	同 朝顔日記	同 盆石皿山奇談	全八冊
同 妹背山	同 年代記		
藤青模稜案	同 雪鏡談	金刀比羅名所圖繪	全六冊

葛齋主人編輯

繪本新説二熊傳

自初篇至三篇

十九冊

該書の文祿元年の頃朝鮮征伐の時其勇將の隨一たる加藤清正の嗣子忠廣に勤仕て
 寵を得し大鷲熊右衛門と云ふ者真蔭流の武道に達し大膽不敵の若漢なり
 常酒興に乗じて傍若無人の働き多き故其一國擧て大鷲を惡むる者あり
 小つて或人其頃武伎に達し飯塚善之進と云ふ者を忠廣に薦めて大鷲と
 較量あさしむ然る大鷲負を取り遂に其遺恨を以て善之進を暗殺す故に
 善之進の嫡子且荒川熊蔵と云ふ者等と相謀り雙言の大鷲を探索せしむ
 つと種々艱難不慮の災に逢ふこと數回と雖も神の冥助を得て免れ事杯を
 著せり而して此奇文婦女子と雖も一たび閱せば一條一條より面白く説解る
 由多々見ましく思ひ玉ふる尚求めて鄙言の虚あらざれば或知りなまへ

各邦書目籍發兌

浪華

三木佐助梓

心齋鐵橋筋北久寶寺町通角

